

大塚敬節
矢数道明
責任編集

世漢方医学書集成

81 片倉鶴陵 一

名著出版刊



南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 81 片倉鶴陵(一) 第三期 全40巻

昭和五十七年十月二十五日 発行

編者 大塚敬節

発行者 中村安孝

発行者 株式会社 名著出版

東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八)一五一一二七〇番代
振替口座 東京七一〇四九四番

製版所 株式会社 日本写真製版社

印刷所 有限会社 伊藤印刷

製本所 辻本製本所



予約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えします。

責任編集

大塚敬節

矢数道明

編集委員

山田光胤

寺師睦宗

大塚恭男

矢数圭堂

松田邦夫



片倉鶴陵肖像

凡 例

一、本書第八十一卷「片倉鶴陵(-)」には、『青囊瑣探』『静儉堂治驗』を収録した。

一、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮少し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、底本にある蔵書印及び書き込みは省略した。

ホ、印刷不明な箇所は、他の版本等により補正したところもある。

一、底本は次の通りである。

青囊瑣探 版本 (享和元年版) 二巻二冊 (矢数道明所蔵)

静儉堂治驗 版本 (文政五年版) 三巻三冊 (矢数道明所蔵)

一、解説は、室賀昭三(日本東洋医学会監事)が執筆した。

片倉鶴陵

室賀昭三

片倉鶴陵小伝

片倉鶴陵は寛延四年（一七五二）一月十七日、木村家に生まれ、幼少のころ、近くの医師・片倉周意の家に養子として迎えられた。鶴陵の生地がどこであるかは諸説があり、決定しがたいが、鶴陵の研究者として名高い森末新氏は鶴陵が当時忌みきらわれていた双生児であり、そのために出生地が分らないのではないかとの説を述べている。そして厚木市の近くのところに煤が谷という地名があり、そこに「片倉屋敷」と呼ばれている地域があり、そこが鶴陵の養父である周意が住んでいたといわれ、四十七歳にして子供がなかったといわれる。

鶴陵の養父の周意の父も医師で、この父は長寿の人であつたので、周意はもっぱら父の助手として山村を馬で往診する役を演じ、著述をする余裕がなかったといわれる。そして周意は鶴陵を養子に迎え、どこの親でも同様であるが、自分の果たす事ができなかった夢を鶴陵に托した。周意の教育方針は

吾ガ道ハ人ヲ濟ヒ物ヲ利スルコトヲ貴ブ。ヨロシク勤苦シテ徳ヲ修メ心ヲ誦読ニトドメテ、聖賢ノ医經ヲ明ラカニシ百家ノ經方ヲ閲シ、他人ノ疾患ヲ視ルコト我身ノ如クスベシ。常ニ蒼生ヲ濟ハンコトヲ念ジテ、汝ノ偷樂ヲ欲スルコトナカレ。ソレ、人身ハ得難ク虚ク過スコトナカレ。コイネガワクバ、書ヲ著シテ来生ノ津梁タラシメヨ。汝ノ身、タトヒ此ヲ以テ寿ナラズトモ我敢テウラマズ……。

という格調の高いものであり、鶴陵に対して相当なスパルタ教育をほどこした。鶴陵は後年に記したもののなかに、誇り高く感謝をこめて回顧している。

鶴陵が十二歳になったとき、養父周意の恩師・多紀元孝の学僕として仕えるべく、上京した。学僕は弟子でなく、召使いであるといわれる。養父が江戸を去るとき、鶴陵は「学もしならざるば再び父母に見えず」との誓いを立て、勉学にはげんだ。鶴陵が多紀家に入門した頃、元孝の孫・元簡は井上金峨の塾に通学していて、そのお伴をすることにより、共に学ぶことができた。鶴陵の貧弱な服装は周囲の人から卑しまれたりしたが、「十年も懸命に勉強して医術に拔群となれば、

自分を卑しんだ学友や駕籠かきを見返すことができる」と齒をくいしばって発憤し、夜間の燈火の使用を許されなかったので、隣室からもれてくる光をたよりに夜おそくまで勉強した。本を買う金がなく、少しの暇を惜しみ、睡眠時間を減らして筆写した。鶴陵は前後十三年間多紀の門にあり、元孝の子・元惠から主として教育をうけ、その「広く文献をしらべ、そのよろしきを探る」学風を身につけることができた。鶴陵は終生、読書のたびに丹念にメモをとり、それを整理する習慣が身についた。

安永四年（二七七五）、二十五歳になった鶴陵は多紀家をはなれ、自宅で開業したが、安永七年冬、火災にあい、本石町三丁目に住んだ。隣には前野良沢の門人で、鶴陵より五歳年長の蘭方医・嶺春泰が住んでいた。春泰の母が病氣だったので、鶴陵が治療してすぐによくなったところからこの二人の親交がはじまり、春泰を通じて蘭方の知識を吸収したが、同時に賀川流の産科があることを知った。春泰は自分が長崎に留学するために貯えたお金を鶴陵に与えて、京都に出発させた。鶴陵の京都留学は百日にみたない短期間であったが、鶴陵は賀川門下随一の名手といわれる程の成長を示し、折をみてはレプラの新しい治療を関西地方で試みた。そして鶴陵が賀川の門を去った数カ月後に賀川玄迪は四十一歳で死去した。もし春泰の好意がなければ鶴陵は産科を学ぶ好機を失い、江戸城大奥への異例の往診もあり得なかったであろう。このように安永七年は、若い鶴陵が多紀の門で身につけた漢方医学の上にオランダ医学と賀川産科を吸収したという、極

めて重要な一年となった。

京都の帰途、相州の養父をともなつて江戸に帰り、ふたたび多紀家や嶺春泰と交わりを結ぶ。三十五歳のとき火災にあい、本銀町に移り、そのとき肺炎になり、元簡の治療をうけている。

三十六歳の時『ばい癘新書』を処女出版し、元簡の校閲と序文をうけている。この本は「理癘新書」と「理癘新書」の二部より成り立ち、鶴陵はこの著作に約十年の歳月をかけている。鶴陵は難治な病氣であつた癘病の治法が巧みであるという一老医に再三金品を送り、ようやくその秘法を買いとり、そのうえに自分の経験などを取り入れ、出版した。この本により、たとえ一人の患者でも助ければ、その功德は大きいと信じ、自分一個の秘術とせず、出版して世に示したと述べる。相当な自信と、秘法を公開する善意を示している。難治な二疾患の治療法を処女出版したのであるから、鶴陵に対する世の医師たちの風当りは相当なものであつたらしい。

しかし、著書に自信をもっていた鶴陵は、「もし、私に七・八十歳の長寿が得られるなら、この目で自分の著書の勝利を確認し得よう。これこそわが人生の最大の景観となろう」といった。やがて真価が認められ、多くの出版を重ね、全国で愛読された。

寛政二年（二七九〇）、松平定信は医学教育の充実をはかり、多紀家の私塾・躋せいじゆ寿館を母体に官立の学校をつくることに定めた。元徳・元簡はその人選に苦しみ、鶴陵を招こうとしたが、鶴陵はそれを「自分は一介の巷の医師として一生を送るつもりであるから」と、師の招きをつらい気

持で断わったという。その氣持を托した四十歳の誕生日の作といわれる次の詩がある。

青騎役役服塩車 不遇孫陽四十年

莫道前賢終草莽 柔風暴雨任天然

寛政五年（二七九三）、鶴陵四十三歳に『傷寒啓微』全三冊を出版した。鶴陵はそれはじめに「医が学問に励む理由は治疾の二字の上にあるのみ」と素直に基本的な見解を表明し、(1)湯液論の原文、(2)古来医家の伝承するもの、(3)張仲景のついだ法、(4)湯液論の文尾に張仲景・王叔和がつぎ、またはその文中に一、二句挿入したもの、(5)後世の人の詩釈追加が原文に混入したもの、(6)あまり価値のないもの、の六つにわけ、結論として『傷寒論』には診断・治療の両面での体系が完成していて、傷寒に借りて百病治療の基準がそなわっていると説いている。この書をもとにすれば、古方・後世方・民間薬や各自が考え出した新しい治療法も、新薬もすべて意のごとく使いこなさうと説いている。

また鶴陵は大切なところは何回も読み直して熟考して施療すべきであるとか、文章をよく考えてその要点を把握することが最も大切であると説いている。

この前年の頃、鶴陵は痘疹について述べた『痘疹微義』を出版しようとしていた。鶴陵の門人・佐藤中節は京都に游学していたが、痘疹の大家・池田瑞仙の門に学び、血判をおした秘伝の書を入手して江戸へ帰った。鶴陵は瑞仙の痘疹書をみて大いにおどろき、門人全員を集めて「池田

瑞仙の痘疹書はなかなか立派である。痘疹につき精通したい者は今日より予をすて、池田氏につき字ぶがよい」と述べ、自著を一葉ずつ火に投じた。門人たちは池田痘疹書に鶴陵の説を記入し、『痘疹規矩』と名づけ、秘藏したと伝えられる。この年に鶴陵は幸帽児をみて、『産科発蒙』の著述に手を染めた。

『傷寒啓微』三冊の出版を完了して二年のちに、鶴陵は『産科発蒙』の初冊を出版し、四年の歳月を費して全四冊の出版を完結した。四十九歳であつた。『産科発蒙』は鶴陵の系統的な著述の『医学質験』の第二番目のものにあたり、産科を主業とした鶴陵にふさわしい力作であり、独創的な点に満ち、治験例も数多く述べられている。

寛政十二年（一八〇〇）、五十歳になつた鶴陵は、その生涯をかざる異例の往診をしている。『静儉堂治験』の序文に、つぎのように述べている。

寛政庚申ノ夏……………、命ヲ掖宮ノ診ニ奉ジテ幸ニ捷効アリ…白金若干ヲ賜フ、栄ハ望外ニ出ツ

原文はわずか二十七字にすぎないが、「命」の一字は欄上にでている。これはときの將軍家斉の命を指している。掖宮とは江戸城内の中奥か大奥である。ここには、医師としては奥医師という身分のたかい医師のみが入ることができる。鶴陵がいくら評判のよい医師であっても一介の町の開業医では、大奥はもちろん、中奥にも入ることを許されない。鶴陵の往診はまことに異例のこと

であるといわなければならない。將軍・家斉には二十一人の側室と五十四人の子供があつたという。その側室の一人お登勢の異常分娩を鶴陵が治療し、見事に分娩させたといわれている。

この頃から鶴陵の名医としてのほまれがいよいよ高くなり、諸侯からの往診の依頼もふえ、患者の数もふえて、一日に薬を求める数は百人に及んだといわれる。

その後、鶴陵は五十五歳のとき会津藩主容頌のため、七月に会津若松まで老軀をおして往診している。不幸にも結果はよくなかったが、鶴陵はこれをはじめとし、会津藩から終生忘れえぬ厚遇をうけることになった。

六十一歳のときに家業を養子であり弟子である山崎玄脩にゆずり、静儉堂は弟子たちにまかせて、朝早くから著述に専念した。また背中にできものができて、体の調子も悪化した。この頃、はじめての男子羊之助が外腹にうまれた。老年になつてはじめて長男が生まれた喜びと、隠居と『静儉堂治験』の著述を行ったことが述べられた文章がある。

このような生活がつづいていたところに文化十二年(二八一五)、六十五歳の鶴陵のもとに常州水戸領那珂郡野口村、大森元昂昌則という全く未知のものからの手紙と小包がとどいた。鶴陵が手紙を読んでもみると、大略次のような文章である。「私は田舎の医家の出ののですが、幼少のころ父母を失い、郷里に良き師友もなく、志をたてて江戸に上り良師をもとめている間もなく大火にあい、空しく帰郷しました。先生の著された著書を買いもとめ、読んでみると大先生に親しく

教えをうけているような気がします。おかげで治療成績も向上しましたし、患者の数もふえました。一度江戸に行き、門人の末席に加えていただきたいのですが、それもできません。私は文章を十分に習っていませんので、大先生のような漢文では書けません。やむなく国字をもつて自分の治験例の一部を書いてみました。そのうちの九例を机下に呈し、水戸紙とソバ粉をお送りいたします」。

鶴陵はこの手紙をよみ、強く心を打たれた。そして鶴陵自身の著書の付録として採用したばかりでなく、著述の文体を変えることとした。これまでの著書はすべて漢文であつたのを、カナまじりの読みやすい文体に改めようと思ひつた。四十年間書きためた草稿はことごとく漢文であるから、これをすべて書きなおさねばならない。これは大きな仕事であつた。

文化十四年（一八一七）、六十七歳で大森元昂は江戸に来て、鶴陵に入門し、ようやく念願がかなつた。元昂は自分の父のような気持で鶴陵に対し、鶴陵は自分の子供のような気持ちで元昂に接し、師弟の情愛はひとかたならぬものがあつたといわれる。鶴陵は自分の持つてゐるすべてを元昂にあたえ、元昂はそれをよく吸収し、秘伝をも授かつた。そして元昂は茨城へと帰って行つた。

文政五年（一八二二）、会津藩の松平容衆侯は正月を会津で迎えた。前年の暮から風邪気味であつた侯は、血痰を出した。正月十四日大咯血し、鶴陵の往診をもとめることになつた。そのとき

鶴陵は七十二歳で病臥しており、だれが考えても老齡病軀の鶴陵が、雪が深い会津若松に行くことは無理に思えたが、鶴陵はそれを承知で若松に行き、容衆侯が二月二十九日に死亡するまで治療した。そしてその後半年して、文政五年九月十一日、鶴陵は多くの人に惜しまれつつこの世を去った。

鶴陵は著書が多く、そのなかに数多くの名言をのこしている。特に『青囊瑣探』上巻には数多くのすぐれたものがあり、われわれの心をうつが、次の文章をもつてしめくりとしたい。

医にして書を読まねば病を治すことはできない。病を治すことができなければ、書を解することもできない。

この二者をよく兼ねそなえてこそ、はじめて真の医と言うべきである。もし、書を読まぬが、病を治せるという者があっても、私は同意することはできない。



片倉鶴陵木座像(没前4ヵ月・72歳)

『漢方の臨床』より、条一舟刻

解題

『青囊瑣探』

本書は享和元年（一八〇一）、鶴陵五十一歳のときに出版され、上下二冊よりなっている。森末氏によると、原稿は『黴癘新書』（三十六歳の時に出版された）よりも先にできていたが、その後加筆され、結局十五年後に出版された。多紀元簡は『青囊瑣探』を先に出版するようにすすめたが、鶴陵は承知しなかったといわれる。

上巻は「医学に志す人のための百十八章」とでも副題をつけたようなエッセイ風のもので、当時の書店の広告文に「これは先生の漫筆風のものであつて医家に限らず、広く一般に読んで、処世に益するところが多い」と述べられている。漢文で書かれており、短いものは一行から長いものは一頁以上のものがある。

エッセイ風のものではあるが、第一話は家庭遺訓できわめて高い理想を述べ、第二話の碑医は生前一葉の著述がなく、死後僅かに墓上一片の石をのこす医者をおのこすように言うと言つて述べ、著述に対する強い意欲を述べている。以下第五話で特に古方を執らずと古方だけでなく、後世方をもとるといふ、自由な学風を述べたり、以下歯槽膿漏にただ一カ所に灸をすえて治したり、人間の愛情や師弟仇讐を述べたりしているが、呼吸短促では呼吸短促があつて後に浮腫を發する者は必ず

難治であり、浮腫があつて呼吸短促を發するものは治しやすいと述べ、長年の経験から割りだした法則を述べ、『前輩信難』では昔から妊娠に使つてはいけないといわれた薬を飲んだ妊婦が何ともなかったことから、古人の教えも必ずしも全部を信用し難いと述べている。

下巻は上巻とかなり異なり、「痘瘡倒靨及痘後内障奇方」から「牙齒疼痛」まで二十三に分かれ、臨床的な症状と、それに対する処方、奇方を述べている。そこに述べられた小児五癰、癰癰の治法を述べているが、現在では参考になり難い。排膿散という処方があるが、これは現在の伯州散であろう。眼科疾患に書かれた処方では明日でも使つてみたいと思われる。その他奇方もあり、蘭方まで記載されている。現在すぐに使つてみたいような処方もあり、有益な書となつてゐる。

『静儉堂治驗』

静儉堂治驗の初冊は文政元年（一八一八）、鶴陵六十八歳の春に、はじめは『治驗』という書名で出版されたが、序文は「静儉堂治驗」となつてゐる。第二冊は文政四年六月に発行されたが、そのときは『静儉堂治驗』と改められてゐる。

そのころの書店の広告文には、つぎの六項目が強調されている。一、鶴陵の数十年來の治驗を集めたものである。二、患者の住所・氏名はもとより、前に診た医師の治療と処方、鶴陵が与えた薬が効いたか効かなかつたかを、包みかくすことなく書いてある。三、麻疹を治療して経験し